

ICTは資源・時間の限界を 超えられるか

大阪ガス(株)
エネルギー・文化研究所
所長
木全 吉彦

「流星号、応答せよ！」

「スーパーゼッター」は1965〜66年に放映されたTVアニメの主人公で、「一千年の未来」からやって来た「知恵と力と勇氣の子」が、悪者を相手に大活躍する筋立てです。タイムマシンでもある「流星号」は電子頭脳(コンピュータ)を内蔵し、自動操縦で水・陸・空を自在に飛び回るスーパーカーのような形をした乗り物です。腕時計にアンテナを付けたような超小型通信機に向かって話しかけ、愛車(?)を呼び出すのがかっこよくて、小学生だった私も真似をして遊んでいたことを思い出します。同時代の鉄人28号や鉄腕アトムと違って、主人公がロボットではなく(未来から来たとしても)生身の人間であることに親近感を覚え、「あつたらしいな」という夢がそのまま形になったような様々な装備に目を見張りました。

爾来50年、マッハ15で飛ぶ「流星号」はさすがに実現していませんが、コンピュータ搭載は当然のこと、自動操縦機能付きの自動車も間もなく実用化されそうな勢いです。また、超小型通信機や音声認識・遠隔操作コントローラ、TV電話などはどれも最近のスマートフォンに搭載

されている機能です。デジタル・ネイティブと呼ばれる若い世代にはピンと来ないかもしれませんが、この50年ほどの間に科学技術が社会にもたらした変化には驚くべきものがあります。

ICTの光と影

情報誌「CEL」102号の特集テーマは、ICTのエネルギーが社会をつなぐです。ICTはInformation & Communication Technology(情報通信技術)の略。日本ではIT(情報技術)ほど人口に膾炙(かいは)していませんが、情報と通信をセットにするのが世界標準です。情報技術の発達は、文字や数値から高精細の音声・画像データに至るまで、記録・検索・計算・閲覧など人間の情報処理能力の限界を取り払いました。一方、通信技術の進歩は、情報をやりとりしたり共有する際の空間的・時間的制約を一気に取り去り、「いつでも、どこでも、誰とでも」つながることを可能にしたのです。ICTが人々の「できたらいいな」を実現することで世の中が便利になり、新たな「できたらいいな」を呼び起こし、さらなる技術革新を招来するというサイクルが今も回り続

けています。「必要は発明の母」ですが、「発明は必要の母」でもあるのでしょう。

しかし立ち止まって考えてみると、私たちは「ICT依存社会」にどっぷりつかってしまったようにも思えます。今この瞬間にインターネットが使えなくなったら、ケータイやスマートフォンがブツンと切れて復帰しなくなったら、そして様々な社会インフラを制御しているコンピュータが暴走したら…。エネルギー同様、情報・通信サービスが安定的に提供されなければ、現代社会は大混乱に陥ります。今後も予想される情報量の増加に対応するために、継続的な情報通信インフラ投資は不可欠であり、万全のセキュリティ対策を打つことも必須ですが、そのために増大するコストを持続的に賄うことは可能なのでしょうか。使い手側もICTに過度に依存しないという心構えを持ち、どこかで歯止めをかけることを考える必要があるのではないでしょうか。資源・エネルギーの有限性からは、増え続けるICT用のエネルギー消費量も気になるところです。

少年易老学難成 一寸光陰不可輕

それまで難なく使いこなし重宝していた道具であっても、性能が向上し精妙になると、使う側の能力を超えてしまうことがあります。使いこなせないだけならまだしも、道具が機能を発揮するために人間が使われてしまうという逆転現象 目的達成のための手段だったはずの

ものが目的となり、それに仕事をあてがうために、実は必要のないことをさせられてしまうような事態 すら想定されます。

モバイル機器を使ったオンライン・ゲームのみならず、メールやチャットのようなネット・コミュニケーションにもその危険性が潜んでいます。迅速性、拡散性はICTならではのものですが、その内容はややもすれば短く、軽く、薄く、また即物的・感情的になりがちです。これに頼り過ぎると、社会人として必要なリアルなコミュニケーション能力が損なわれかねません。

コミュニケーションが必要となる場面は多種多様で、必要なスキルもさまざまです。相手を説得する文章力やディベート力、円滑な人間関係を築き、維持するためのマナーや社交力、時に相手の表情、しぐさ、声音からメッセージを読み取る力など、身に付けるべき能力は今も昔も変わらないはず。

ところが、次代を担う若者たちの中には、そうとは意識しないままネット・コミュニケーションに時間とお金をかけ過ぎる人がいるように見受けられます。彼らはリアル・コミュニケーションや学問、読書、スポーツ、自然との対話などコミュニケーション以前の重要な活動に時間やお金を振り向けられず、あるいは故意にそれらから遠ざかってしまいます。ICTに流され、溺れて、あたら、柔らかな頭脳や筋肉を鍛えることなく放置してしまうことがないよう、家族、学校にとどまらず、社会全体が注視し、手を差し伸べる必要があるのではないのでしょうか。

先行きが不透明な今こそ、難題に立ち向かう知恵と力と勇氣の子が、必要なのですから。

CEL